

筋緊張異常に対するアプローチ

関西医療大学大学院 鈴木俊明

筋緊張異常は、さまざまな疾患にみられる。たとえば、脳血管障害片麻痺患者における筋緊張異常には、痙縮のような一次的障害によるものだけでなく、筋短縮のような廃用症候群、いわゆる二次的障害によるものがある。また、痙縮筋に筋短縮が認められるような病態もあるために、筋緊張異常の病態を明確にわけるとは困難である。運動器疾患では、筋力はほぼ正常であっても動作が円滑に行うことができない場合や、大腿四頭筋のように構成される筋の一つの機能不全で動作が円滑に行うことができない場合に筋緊張異常を用いることになる。

本講義では、筋緊張の使い方について明確にしたい。次に、アプローチに関して紹介する。アプローチに関しては、私が研究ですでに報告した持続的筋伸張の効果研究、リラックスイメージを用いた効果研究について述べる。また、その他の運動療法についても紹介したい。